

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書
(5年計画の4年度目)

1. 研究課題

(和文) 術数学—中国の科学と占術

(英文) Study on Shushu : Science and Divination in China

2. 研究代表者

(氏名) 武田 時昌

3. 研究期間

平成22年4月から平成27年3月まで

4. 研究目的 (400字程度)

術数学は、自然科学の諸分野と易を中核とする様々な占術とが複合的に絡み合った中国に特有の学問分野である。東アジア世界の科学文化を構造的に把握し、学問的な本質や特色を明確にするには、近代科学の先駆的業績として離散的な発見、発明を時系列に並べて顕彰するだけでなく、当時の科学知識がいかなる役割を担っていたかを分析的に考察する必要がある。そのような研究を遅滞させている最大の要因は、術数学がほとんど未開拓のままに放置されているところにある。そこで、術数学を総合的に研究するプロジェクトを立ち上げることにした。

研究の手がかりとして、近年出土した簡帛資料には先秦から漢代に至る科学や占術に関する論説が満載されていることが注目される。また、日本に残存した『五行大義』『医心方』や陰陽道資料にも、中世の術数書の佚文が多数引用されており、きわめて有益である。それらの読解を通して、術数学の全体像を解明し、理論構造の特色を探る。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

2012年度は、ゲストスピーカーの特別講演と班員による研究発表を行う研究集会を月1回開催した。加えて科学と宗教、宗教の境界領域にわたる文献を会読しながら術数学の形成と展開を検討する読解ワークショップを月2回行った。取り上げたテキストは、張衡『靈憲』、敦煌出土『宅経』、『卜筮元龜』、張杲『医説』、虞搏『医学正伝』などである。年度末の3月18日には、大正大学にて東京ミーティング2013を開催し、小川陽一東北大学名誉教授の特別講演と班員による研究発表を行い、関東の研究者と情報交換を兼ねた討論会を催した。

また、術数学に関心を有する国内外の研究グループと連携を深め、合同で文献調査を行い、研究討論会を開催した。主な調査先は、2012年8月25-27日に天地瑞祥志研究会(代表:水口幹記立教大助教)と陽明文庫、大將軍八神社皆川家文書、京都府立総合資料館若杉家文書、2013年2月に北大易占研究グループ(代表:近藤浩之北海道大学准教授)と京大附属図書館清家文庫、春日大社などである。さらに、2012年6月21-23日にソウルで、2013年3月8-10日に京大人文研にて韓国、中国、内蒙古の科学史研究者と国際ワークショップを開催し、科学史研究の今日的課題を協議し、術数学研究の目的や意義を提言した。

6. 研究成果の概要 (400字程度)

2013年度における中心的な論題として陰陽五行の五藏配当説をめぐる考察を取り上げ、『五行大義』巻三、論配声音の読解を通して、五味が医学、本草学や養生思想、食文化などにどのように応用されているのかを討議し、その理論構造の特色を考察した。また、『卜筮元龜』の諸テキストを校合し、その内容を検討することで、易占の数理的把握を試み、断易の成立史や日本的受容を探った。それらの考察を通して、術数学の学問的輪郭を明確にし、中世、近世的な展開について具体的様相を窺った。

主催した国際集会において、術数学的なアプローチによる科学史研究の必要性を提言して、中国、韓国の科学史研究者に術数学研究プロジェクトの推進を呼びかけ、国際的な共同研究の体制作りを行うことができた。次年度において、中国においては上海交通大学科学研究員及び内蒙古師範大学科学技術院を中心とする科学史研究グループと京大人文研科学史研究会との研究協力の提携を結ぶことになった。また、韓国術数学学会と国際ワークショップの開催を協議し、2013年9月にソウルにて実施することになった。

7. 共同研究会に関連した公表実績 (出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など) <国際ワークショップ>

1. 第一回Templeton東アジアの科学と宗教” 国際ワークショップ

2012年6月21-23日 ソウル大奎章閣

(テンプレトン財団のプロジェクト支援によるソウル大科学史研究室(代表:金永植教授)との共催、総合テーマ「東アジア世界の「知」の伝統:科学と思想、宗教のあいだ」、術数学研究会の班員10名を含む日本、韓国、中国の研究者18名による研究発表&シンポジウム)

2. 術数学国際ワークショップ2013

2013年2月12-14日 京大人文研本館セミナー室1

(北海道大学大学院文学研究科中国文化論講座(代表:近藤浩之准教授)との共催、総合テーマ「易占研究の本質と日本的展開」、3名による研究発表、呉偉明教授(香港中文大学)による特別講演と術数学国際シンポジウム2013(総合テーマ「易占の創造力—東アジア社会に何をもたらしたのか」)

3. 東アジア数学史国際ワークショップ(第Ⅱ期第2回)&科学史国際シンポジウム2013

2013年3月8-10日 京大人文研本館セミナー室1

(東アジア数学史国際集会実行委員会(委員長:小林龍彦前橋工科大学教授)との共催、前2日の数学史国際ワークショップにおいて中国からの招聘研究者11名を含む14名の研究発表、最終日に科学史国際シンポジウム2013(人文研術数学研究会による主催)において、班員1名による研究発表、宮島一彦(同志社大学元教授)による公開講演、紀志剛(上海交通大学科学史與科学文化研究院教授)・董煜宇(上海交通大学科学史與科学文化研究院副教授)による特別講演及び合同シンポジウム(テーマ:「東アジア世界の科学文化を考える」)

<公開講演集会>

1. 科学史公開講演会

2012年7月21日(土) 京都大学文学部新館2階第3演習室

(日本科学史学会京都支部との共催、招聘外国人学者Gerhard Leinss(ケンブリッジ大学研究員)を含む2名の講演)

2. 術数学東京ミーティング2013

2013年3月18日(月) 於大正大学巢鴨校舎

(メンバー3名の研究発表、招聘講師1名(小川陽一東北大学名誉教授)による特別講演と公開討論会(テーマ「術数学の学問的輪郭と形成過程」)

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数			延べ人数		
		外国人	大学院生	外国人	大学院生		
学内（法人内）	3	14	5	9	246	95	112
国立大学	6	6	0		55	0	23
公立大学	3	6	1	3	61	15	35
私立大学	16	26	4	7	279	16	81
大学共同利用機関法人	1	1	0	0	18	0	0
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0
民間機関	2	2	1	0	12	6	0
外国機関	5	5	4	0	31	24	0
その他	6	6	0	0	73	0	0
計	42	66	14	19	775	156	251

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例) ・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた(参加した場合)：参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

(参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

論文数	()	()
うち国際学術誌に掲載された論文数	()	()

※下段の()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割	()	()
論文数	()	()
うち国際学術誌に掲載された論文数	()	()

※下段の()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち

主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由		主なもの	
掲載雑誌名	掲載論文数	論文名	発表者名